

(八) 玄關

下駄箱(實習の際に使用する草履、足袋をおく)

帽子かけ(實習用の麥稈帽子)

實習生産物拂下品掲示板。

(二) 園丁室

疊(二疊)の間、晝食後園丁の休憩及び冬期温室をたく間の宿直に用ふ。

土間、タ、キとし中央に爐をきる、こゝにて培養土の消毒、病害蟲防除劑の調製等をなす。

(三) 實習

實習の際には生徒は實習豫定を見、更衣室にて袴を去り作業服をつけ、次に實習の説明をきき、玄關にてはきものを更へ帽子をかむり、器具を携へ夫れぞれ實習場に行く順序となる。

尙ほ建物經費は約三千圓即坪百圓あたりなり。物價暴騰の今日故標準にはなり難しと思はる。

日光足尾地方修學旅行記(其一)

理科三年(物化、專修科)

七月六日、金雨 上野より中禪寺湖に至る。

朝五時二十分上野發日光行に乗る、見渡す限り水田青々たる中を走る、利根の大河筑波の秀峯を賞で、ほどなく汽車は小山につきぬ、これよりは武蔵野を後に刻々高臺となり秩父、榛名、赤城、那須等の諸山陣中に集る、先程より降り始めた雨、宇都宮より一層はげしくなりぬれば一行の眼は

外の景色をはなれて車内の談話に花咲きぬ。

午前九時三十分日光驛に下車、停車場内にて雨の仕度をなし、電車を待てども來らず、やむなく徒歩にて日光町を通り大谷川を過ぎて東照宮廟に至る大谷川に架せられたる神橋の朱欄雨に洗はれて清し、杉並木を登れば三佛堂に至る、近く相輪塔あり、馬場先を北に急ぎ東照宮に至る大鳥居に掲げられたる扁額、後水尾天皇の御親筆なり、樂師堂にて狩野安信によりこの天井に書かれたる龍の下にて手を打ち面白き反響を聞く、陽明門の美を賞し、坂下門にて左甚五郎の眠り猫を見る、坂下門より石段を上り奥の院にて唐銅製の寶塔の下に家康公安らかに眠れり、かくて境内の茶店にて中食せしは午後一時頃なりき、東照宮廟拜觀に意外の時を費せし爲大猷院廟は殆ど駢足の姿にて見る。

午後一時半日光ホテル前より電車にて馬返に向ふ途中清瀧にて下車一時間餘を費して精銅所を見る(旅行記其二A参照)再び電車にのり馬返に至る。

午後四時小荷物全部合力に渡し草鞋に襷がけの輕装にていよいよ雨上りの山路にさしかゝる、幸橋の邊景色極めて佳年若き畫家二人、人の來るも知らで寫生せり、大方秋の上野を飾る資ならん、中の茶屋にて般若、方等の二瀧を遠望し時移りたればとて舊道を行く、磁石岩を過ぎ不動坂を登り大平に着きしは暮色蒼然たる頃なりき、薄暗き樺の下道を通り華嚴瀧に行く、思ひしよりは小なり、宿より迎への提燈を便りに闇の夜道を狐の何やらの如き行列して中禪寺湖畔の宿に辿り着きしは午後七時半なりき。

七月七日土雨、中禪寺より湯本に至る。

華嚴の瀧は日本第一の瀑布なりされど瀑底より之を眺むるに非ざれば眞の偉大なる姿を見る能はずと聞き居れば如何にもして見たきものと午前四時起床雨を冒し熊笹分けつゝ瀑底に至る轟然百雷の音して七十丈の水柱直下して飛沫雪を吹きて偉觀云ふべからず着物は非常にぬれたれど満足して歸る人は皆暑に苦しむ七月七日炭火起して暖を取りつゝ着物を乾す。

舟を湖上に浮べ水路菖蒲ヶ濱に行き戰場ヶ原に出づる豫定なりしも雨のため其楽しみは全く絶え兎に角九時迄自由行動を取り雨の模様を見る事となる、華嚴に行くあり土産買に行くあり、九時に一同集りしも、雨はやまず遂に雨を冒して出發す、二荒神社を遙拜し菖蒲ヶ濱にて養魚場發電所を參觀す、龍頭の瀧を見急坂を過ぎて戰場ヶ原に出づ、雨にかすむ廣々たる高原の景色實によし、原の中央にて正午は過ぎぬれど休まん茶店もなく背の辨當は重くなりぬ、逢ふ人毎に湯本への道程問へば一時に半里も遠くなる事あり近くなる事もありぬ、降る雨の中を黙して歩を運ぶ事多時、突然先頭の立止まりたるに何よと急ぎ行けば此處より道左右に分る、倒れたる道しるべを起し見れば右湯本道左湯瀧を徑てとあり、左を取りて間もなく湯瀧に至る、華嚴よりよしなどいふもありき、瀧側の急坂を攀ち湯湖畔に出づ、中禪寺湖よりは小なれども趣數等優れる感あり、この時三十路女の背に兒を負ひたるに逢ふ、彼の草履の新らしきに行先の近づけるを思ひ喜びて岩角を廻れば湯本温泉眼

前に現はる、硫化水素の臭先づ鼻を衝く、午後一時半宿に入り晝食をなし漸く蘇生の思ひをなす、湯に入りのびのびと休む、昨日の如く途中暗くなるを恐れ、心残れど三時半出發す、湯本分岐點にて植物採集の一行に逢ふ戰場ヶ原の獲物朋亂に餘りて帽子の飾りに首飾りに眼もさむる許りなり、宿につきしは午後六時半、月あれば船を湖上に浮べたきも怪しき雲行きに此願ひも叶はず三先生を中心に茶話會を開く。

七月八日、日晴 中禪寺より足尾に至る。

空は遺憾なくはれたり、嬉しさ限りなし、山越の仕度なし宿の前より船に乗る、中頃に至りH氏俄かに立つて舵子となる、霞ヶ浦にて磨ける腕船頭もさすがに驚けり、興は盡きぬに船は合瀉に着きぬ、後の思出にと持參せる寫真機にて寫真を撮す。

水を出づれば直ちに山路、上り八町と聞けどなかなか急にして大汗を流す、頂上にて休む、西の空むらむらと煙に覆はれしは問はずして彼の地の足尾なるを答ふるものなり、煙毒の爲めに此頂上を界に行手には木といふ木はすべて立枯の姿にて草もなく只あはれなる山骨を表はすのみ、途中茶店にて休み三時間餘ごろごろの石道をひた下りに下る、漸くの思にて足尾町の端なる暢和館に着きしは〇時半なりき、午後は程遠からぬ赤倉の精煉所參觀に費す、(旅行記其二B參照)丁寧なる説明を受け充分了解せられてうれしかりき。

七月九日、月晴 足尾より歸京。

朝八時より赤倉精煉所に行き昨日見残したる分析所を見る、得る所多し歸りに礦石などを貰ふ、九時頃鐵道馬車にて此處を發し半時間位にして通洞に着く、此邊漸く綠深し此處にて採礦場及撰礦場の參觀をなし親切なる説明を受け停車場前なる茶店にて中食をなし午後〇時五十二分通洞驛發歸京の途に着く、途中小山、桐生にて乗換、車中にて夕食をなし上野に着きしは午後七時半なりき。

日光足尾地方修學旅行記(其二)

足尾銅山ニツキテハ二十二號ニ詳シク記載アリ故ニ此處ニハ旅行中見學セシモノ、内同號ニ記載ナキモノ、ミヲ記スコト、セリ。

A. 日光電氣精銅所

一、事業ノ現況

當工場ハ古河合名會社ノ經營スル事業ノ一ナリ、從來我國産銅ノ大部分ハ荒銅ノ儘海外ニ輸出セラレ、銅線其他ノ加工品ハ悉ク海外ヨリ輸入セル状態ナリシガ、當所事業ノ發展ニ伴ヒ、銅線ノ輸入ヲ漸次減少シ來リテ、今ヤ全ク其跡ヲ絶チ、全國需用ノ約九割ヲ當所ヨリ供給スルニ至リタルノミナラズ、餘力ヲ以テ海外市場ノ需用ニ應ズルノ盛況ヲ呈スルニ至レリ。

二、原料及ビ製品ノ種類

原料タル荒銅ハ足尾、阿仁、永松、大鳥等ノ古河經營ノ各山ヨリ來ル。

製品ハ概略次ノ通リトス

電氣精銅 年産額 4500 萬斤

精 銀	同	9000 貫
金	同	100 貫
銅 線	同	1800 餘萬斤
銅條棒管	同	100 萬斤
眞鍮製品	同	140 餘萬斤

三、操業ノ概要

1. 併列式電氣精煉工場

足尾ヨリ來ル「ベセマ」荒銅ヲ併列式電氣精煉法ニ依リテ電氣分解ヲ行ヒ、電氣精銅ヲ作ルト同時ニ、金銀ヲ採集ス、其方法ハ電解槽ニ前記「ベセマ」荒銅ト「カソード」板ト稱スル種板ヲ交互ニ装入シ、之ニ丹礬液ヲ流通シ分解セシムレバ、銅ハ純銅トナリテ「カソード」板ニ附着シ金銀ハ黑色泥狀物トナリテ槽底ニ沈澱ス。

2. 煉銅工場

容量 7 萬斤ノ反射爐四座ヲ設ケ分銅工場ヨリ製出セル電氣精銅ヲ上記反射爐ニ装入熔融シテ、丸形精銅及ビ銅線ノ材料タル棹銅ヲ鑄造ス、此外阿仁、永松、大鳥等ノ諸山ヨリ來ル荒銅ハ、同ジク反射爐ニ装入熔融シテ不純物ヲ除去シ平形ニ鑄造シテ之ヲ原板工場ニ送ル。

3. 原板工場

直列式分銅ニ用ユル原板ヲ造ル所ニシテ煉銅工場ニテ鑄造シタル含金銀ノ平形銅ヲ反射爐ニテ燒鈍シ「ロール」ニテ厚サ二分位ノ板ニ延シ、之ヲ鋏切機ニテ切斷シテ直列式電氣精煉工場ニ送ル。

4. 直列式電氣精煉工場